志雲会東京第一回勉強会
テーマ：「古事記　大国主命の国譲り」　要約（その 1）

松田　武

＜プロローグ＞

志雲会東京の旗揚げ打ち合わせ会が行われましたのは昨年（令和元年）１２月５日でした。そして、志雲会東京の第一回勉強会は本年１月１６日に行われ、講演者を含む出席者は１１名でした。第一回勉強会は「古事記　大国主命（おおくにぬしのみこと）の国譲り」のテーマで松田が担当させて頂きました。勉強会のあと、志雲会関西の近藤相談役より、志雲会のホームページに掲載したいので、要約文を作成して送って欲しいとの要望がありました。

実は小生、昨年「古事記」については小さな勉強会で３回講演をさせて頂いております。「大国主命の国譲り」などとテーマを決めてでもキチンと講演をやりますと、古事記の神話部分は壮大なるスペクタルドラマになっていますので、語るには２時間以上を要します。志雲会東京第一回勉強会では途中かなり飛ばして、絵図などを示しながら約１時間１５分ほどで納めることができました。この「古事記　大国主命の国譲り」について、何回かに分けてお届けさせて頂きたいと思います。

出雲大社の大国主命像

その前に記紀と言われるように古事記は日本書紀と並べて語られることが多いので、簡単に比較させて頂きます。

「古事記」
天武天皇（第 40 代）が 681 年、皇室の記録「帝紀」と神話・伝説を記した「旧辞」を整理・一本化するため、側近の稗田阿礼(ひえだのあれ)に覚えさせました。天武天皇の死去で中断したが、元明天皇（第 43 代）が太安万侶（おおのやすまろ）に阿礼の語りを聞き取って編集するよう命じ、712 年に献上されました。3 巻あり、国の誕生から推古天皇（第 33 代、最初の女性天皇）の時代までの神々の世界や天皇家の系譜を描く。天皇による国土の支配や皇位継承の正統性を国内に対して示しています。日本人に読みやすいように万葉仮名と呼ばれる一種の仮名に混じった独特の漢文体を用いた変体漢文です。

「日本書紀」
720 年(養老 4 年)に完成したとされる日本で最初の勅撰正史(ちょくせんせいし)です。勅撰正史とは、天皇の命令によって国家が編纂した歴史書のことです。即ち、唐や新羅など東アジアに通用する正史を編纂するという目的で書かれています。そのため日本書紀はすべて漢文で書かれており、全三十巻と系図一巻で構成されてます。日本書紀の編纂期間はおよそ 39 年間といわれており、4 か月で完成した古事記に比べるとかなりの時間を要しています。本年２０２０年は日本書紀完成からちょうど１３００年目にあたります。
　それでは「古事記　大国主命の国譲り」の始まり、はじまりぃ！

１．最初に現れた神々

（１）別天つ神（ことあまつかみ）の誕生

古事記本文は次の文章で始まります。
（原文）
天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神訓高下天、云阿麻。下效此、次高御產巢日神、次神產巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。

（口語訳）
あめつちのはじめのとき　たかあまはらになりませるかみのみなは　あめのみなかぬしのかみ
天地初發之時、　於高天原成神名、　天之御中主神

つぎにたかみむすびのかみ　つぎにかみむびのかみ
次高御產巢日神、　次神產巢日神。

このみはしらのかみは　みなひとりがみなりまして　みみをかくしたまいき
此三柱神者、　並獨神成坐而、　隱身也。

まず、高天原　はどう読むかについて。

“たかまがはら”とう読む人が多いですが、本文に　訓高下天、云阿麻　と注釈が出ているのを参照すると、これは「高ノ下ノ天ハ、“アマ”ト訓ズ」となり、“たかあまはら”と読むのが正しいと言えます。

次に現れたのが、宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこじのかみ）と天之常立神（あめのとこたち）の神です。これら５柱の神々は「別天つ神」と称せられ、別格の神々であります。

（２）神代七代（かみよななよ）の誕生

次に誕生した神々は神代七代と言われます。

① 國之常立神（くにのとこたちのかみ）、
② 豐雲上野神（とよくもののかみ）。この二柱の神は一人神。
　以下二神で一代の神
③ 宇比地邇上神、次妹（妻）須比智邇神
④ 角杙神、次妹活杙神二柱、
⑤ 意富斗能地神、次妹大斗乃辨神
⑥ 於母陀流神、次妹阿夜上訶志古泥神
⑦ 伊邪那岐神、次妹伊邪那美神。

即ち、国生みで有名な伊邪那岐神（いざなぎのかみ）、次妹伊邪那美神（いざなみのかみ）は神代七代の神であります。

（注）これらの神々の御名をすべて覚える必要はありません。

神名		分類① 誕生場所		分類② 別／七代		分類③ 単複	
天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）		1	高天の原（たかあまはら）	1	別天つ神（ことあまかみ）	1	独神（ひとりがみ）
高御産巣日神（たかみむすひのかみ）		2		2		2	
神産巣日神（かみむすひのかみ）		3		3		3	
宇摩志阿斯訶備比古遲神（うましあしかびひこぢのかみ）		1	国（くに）	4		4	
天之常立神（あめのとこたちのかみ）		2		5		5	
国之常立神（くにのとこたちのかみ）		3		1	神世七代（かみよななよ）	6	
豐雲野神（とよくもののかみ）		4		2		7	
宇比地邇神（うひちにのかみ）	須比智邇神（すひぢにのかみ）	5		3		1	双神（たぐへるかみ）
角杙神（つぬぐいのかみ）	活杙神（いくぐいのかみ）	6		4		2	
意富斗能地神（おおとのじのかみ）	大斗乃弁神（おおとのべのかみ）	7		5		3	
於母陀琉神（おもだるのかみ）	阿夜訶志古泥神（あやかしこねのかみ）	8		6		4	
伊邪那岐神（いざなぎのかみ）	伊邪那美神（いざなみのかみ）	9		7		5	

（３）伊邪那岐神と伊邪那美神の国生み

於是天神、諸命以、詔伊邪那岐命・伊邪那美命二柱神「修理固成是多陀用幣流之國。」賜天沼矛而言依賜也。

ここに天つ神、諸の命（みことのり）もちて、伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱の神に、「この漂える國を修め理（つく）り固め成せ」と詔りて、天の沼矛（あめのぬぼこ）を賜いて、言依（ことよ）さしたまいき。

この天つ神の命令によって、伊邪那岐命と伊邪那美命は国生みを始められます。先ずは、日本列島に浮かぶ数々の島を生み、その後山の神、海の神、川の神などを生み、食物を司る神を生み、遂に火之炫毘古神（ひのかがみひこのかみ）、またの名を火之迦具土神（ひのかぐつちのかみ）という火の神を生んで、伊邪那美命はみほと（女陰）を焼いて、病に伏せることになります。

伊邪那岐命と伊邪那美命

その後も神々をお生みなりますが、結局、この焼けどが原因で伊邪那美命は「遂に神避さりましき」、お亡くなりになられます。伊邪那美命は、出雲國と伯伎國（ははきのくに）の堺にある比婆之山（ひばのやま）に葬られます。

伊邪那美命の死に腹を立てた伊邪那岐命は腰に付けた十拳劒（とつかのつるぎ）を抜いて火之迦具土神の頸を切ってしまいます。その滴り落ちた血からさまざまな神が生まれることにありますが、その中に大国主命の国譲りの際に登場します、建御雷之男神（たけみかずちのおのかみ）がいらっしゃいます。建御雷之男神は茨城県の鹿島神宮のご祭神として知られております。

（続く）